

早稲田大学科外講演

共産主義を越えて
革命へ

ピーター・ハワード

東京都港区麻布富士見町19 MRAハウス

共產主義を越えて革命へ

四月二十五日、英國の著名な政治評論家であり、劇作家であるピーター・ハワード氏は早稲田大学の今年はじめの科外講演に招かれた。小野梓記念講堂で、廊下にはみ出るほどいっぱいに入った学生を前に氏は「共產主義を越えて革命へ」と題し一時間半にわたり講演した。ここに掲げるものは、その講演の全文である。早稲田大学の講演はきわめて權威あるもので、これまでにロバート・ケネディ米司法長官、ネール首相、スカルノ大統領、アデナウアー首相、ガガーリン少佐などが招かれている。

世界は三つの事実に直面

他の多くの人と同じように、私の人生も幾多の曲折浮沈を経て今日に至りました。そして、今日、此処で皆さんにお話するようにお招き頂いたことは、まことに喜びに堪えません。

一九二六年、私の友人の一人がカール・ラデクに招かれてモスコウに行きました。ラデクは、作家であり、学者であり、当時はスターリンの寵を得ておりましたが、後になって、彼の知性が干渉万化する覚の方針に従いきれなくなつて遂に射殺された人です。ラデクは、私の友人を或る大学に案内し、そこで二百人の中国人の学生が勉強しているのを見せました。彼らは貧しい身なりの一風変わったグループでした。私の友人は彼等から大して深い印象をうけませんでした。ところがラデクはこう言いました。「今に見ていたまえ。二十年後には、この連中が中国を支配するようになるだろう。」そんなことは当時は不可

能に思われました。しかし、ラデク予想より二年おそかったのですが、二十二年後に中国は彼等の手に帰したのです。

私の話を今日聞かれる皆さんはもしその決心をなさるならば、二十年といわずもっと早く、日本のみでなくアジア大陸の方向を変えることができる人々です。しかし、そのためには、立身出世や個人的な計画や、恐れや、あるいは憎しみを捨てて、先ず革命にすべてをかけなければなりません。そして、この日本の国に対して共産主義よりも軍国主義よりも知性主義（インテレクチュアリズム）よりも大きいテーマを歴史の次の段階として受け入れなければなりません。それは、再建された世界人の希望なのです。現在、世界は三つの事実に向直しております。

一、原水爆

人類は融合の秘訣を発見する以前に自殺の方法を学んでしまいました。何かの答えを見ない限り、人間は、みづからつくり出した問題によって、みづからを破壊してしまう

でしょう。

二、広範な社会不正と経済的不平等

世界には、すべての人の必要を満たすだけの資源があるにもかかわらずいまだに貪欲が人類を支配しております。何億の人々が住む家もなく食べるものもなく苦しんでいるにもかかわらず一部の人があまりにも多くをもちすぎています。

三、伝統と道義の崩壊

すべての伝統的な価値が今や根本的にぐらついています。不純潔が利巧だと思われ、暴力が近代的だといわれ、正直であることは古くさいと考えられております。人類は、みづから動物のような生活をしながら、しかも、国際情勢が悪化し収拾できなくなっていくのを見て驚いています。

スターリンとヤルタ会談

世界の崩壊を避けるためには世界の革命が必要です。しかし、この混乱を收拾するためには、その革命は大きく、且つ、迅速でなければなりません。スターリンは革命家でした。戦時中、彼はしばしばクレムリンでお客様に昼食を御馳走しました。私の友人で或るアジアの国の大使が、度々、この昼食に招かれました。一九四四年の或る日、この昼食会の席上、スターリンは大勢のいる前で、米國と英國を口をきわめて罵倒しました。あとで、私の友人の大使がスターリンにききました。「なぜあんなことをいったんです。あなたの國は、危険な戦争をしている。勝敗はまだいづれとも分らない。何だって、連合國を攻撃するののか。」スターリンは、あわれみに似た表情をうかべて大使にいました。「あなたは、本当のことがなんにも分っていない。世界共產主義の唯一の脅威はドイツが強くなることだ。戦争が終れば米英はドイツと妥協するに違いない。われわれは、どんなことがあってもドイツが決して立ちあがることのないようにする決心だ。だから、アメリカと英國を攻撃したのだ。」

戦後、ドイツと日本が、西欧の手によってできる限りこの立場を制限されてきたのは実はそのためなのです。国際情勢にあまり大きな役割を果たさないように小さくなって静かにしていることを兩國は強制されたのであります。日本が受けたのは單に敗戦の傷だけではなかったのです。われわれは占領軍として日本に来て意識的、計画的に、日本の伝統を破壊したのです。何もその伝統のすべてが良いものばかりだったとはいえないかもしれせん。しかし、全部悪かったのではないことは、間違いないありません。われわれは、日本人に愛國心を輕蔑することを教え、天皇や國を愛することは、時代おくれであると言いつづけてきました。冷たい、西欧の物質主義を無理やりおしつけました。そして、過去の日本の間違いを言い立てて、将来の世界の指導には參画することができないし、また、してはいけないのだと言いつづけてきました。

これは、意識的、計画的になされたことで非常な間違いです。日本は偉大な國です。過去の記憶におびやかされて将来の正しい役割を演ずることを拒否するようなことは正しく、

ないのです。

ところが、西欧諸国はいまだに自分たちの勝手な政策を韓国やマレーなどアジアの国々に無理やりおしつけようとしています。西欧がいまだに他人の生き方をとやかくいつているのは、喜劇的な悲劇であるといわねばなりません。我々の世代だけを考えてみても、西欧の中から二つの世界大戦、ファシズム、ナチズム、そしてその中から生れてきた経済的社会的貧困は、マルクスが世界共産主義を作り出す温床を提供したのです。

日本は米国のようになるべきでなく、ソ連のようになるべきでもありません。日本は日本です。日本は過去をわすれて我々と共に過去の残骸の中から新しい、そして健全な運命を作り出すという特權と使命を持つべきだし、持つだろうと思います。

ふたたびスターリンの事にもどりましょう。一九四六年、私の友人のアジア大使が、戦後にスターリンをクレムリンに訪ねました。大抵は質問しました。「もう一度戦争があらうでしょうか」。スターリンはしばらく考えていいました。「今の調子で物事が進め

ば、我々は戦争をしないで、世界を取ることができたらう」私の友達は重ねていいました。「それでは、平和が来るのですね」。スターリンは、彼独得の冷たい笑いをうかべていました。「平和などというものは絶対にありえない」。

連合軍の指導者達、ルーズベルト、スターリン、チャーチルの三人がヤルタで会談をしました。その時スターリンは世界をから取ることを考えていました。ところがルーズベルトとチャーチルは、戦争を止める事だけを考えていました。つまり目的が非常に違っていたのです。ソ連はイデオロギーを持っていたのに対して、米国、英国は当時は勿論、現在もイデオロギーを持っていないのです。

チャーチルはあまり口をききませんでした。ルーズベルトはすでに病人でした。しかも彼はのちに共産主義者である事があきらかになったアルジャー・ヒスのような人に囲まれていたのです。我々が今わすれてならない事は、アルジャー・ヒスはその後、その地位を失ったけれども、その頃と同じ人々が今のワシントンの国務省の政策をきめているのだと

いう事実です。そして十年前、同じ彼等の政策が中国を共產化においやったのだという事実です。

ヤルタにおいて米國と英國は、戦争終了のあかつきには、一億五千万の東ヨーロッパ人をソ連の支配下におく事を取りきめました。フランスはその件について相談を受けませんでした。ドイツもまた相談されませんでした。ところがこの時の状況が現在のヨーロッパの政治に大きな影響をあたえているのです。

数週間前、ボンで私はアデナウアー首相と会いました。我々は、最近、二年間、欧州各国の政治家が、政策の基礎としていた共同市場の計画が画餅にきした事などを話し合いました。フランスが英國の共同市場加盟を拒否したのです。その理由は経済ではなく政治でありました。

フランスは昔から東欧諸國と伝統的なつながりを持っています。東欧諸國を過去においてソ連に渡すという実績を持つ米國と英國は将来において必要となれば今後は西欧に対し

て同じ事をするであろうとフランスは感じているのです。

一方フランスは、また、米國の軍事政策を検討しています。最初に通常の武器を使い、次には局地的な原爆を使用し、更に敗北の可能性のある場合のみ全面的な核戦争に移るという政策です。フランスとしてはその局地戦争なるものがいったどこで戦われるものであるか、また誰がいつ、どこで核戦争に移るかをきめるのであるかを知りたいです。そして米國のマクナマラ国防長官が最近、「米國は連隔の地にある外國の都市を守るために本國の各都市に対して原子攻撃を受けるような危険をおかすことはしない」と言明した事を良く記憶しています。

今年のはじめナッソウで、英國の首相はケネディ大統領と会談し、米國が英國およびフランスに対しポラリス潜水艦とこれに使用する誘導弾を提供する事をとりきめました。英國はこの誘導弾に装備する核弾頭を作る能力を持っています。フランスにはその能力がありません。また西ドイツは一九五四年の条約によって原爆はいつさい製造しない事と約束

しています。いかえればナッソウの条約が実施されれば欧州において核装備を持つ国は英国だけとなるわけです。ところがフランスは英国が自国以外の国を守るために原爆を使おうかどうかをうたがっています。フランスはもしソ連が西に進出して来た時にはこれに對抗するために、自分自身の原爆を保有しなければならぬと考えています。

このような政策が正しいといっているわけではありません。しかし現在、人類をおびやかしている危機に対処するためには、そのような事実を理解しておく事が大切です。

ソ連外交官との会話

最近、私はあるアフリカの大使館でソ連の指導的な外交官の一人と会いました。彼は私を英国の外交官と間違えました。彼は私がジュネーブの軍縮会議の代表を知っているかと言いました。私は「知っている」と答えました。そこで彼はこういいました。「ソ連は自由世界に対して一つの大きな利点を持っている。それは我々は世界を変革しようという

強力なイデオロギーを持っているのに対して、自由世界はきわめて弱いイデオロギーしか持っていないという事である」私は「自由世界にはイデオロギーなどがあるのか」ときかえました。彼は笑って答えました。「自由世界にイデオロギーはないのだ。」

その時かねて知合いのエチオピアの大使がやって来て私に挨拶をしました。そしてMRAの創始者であるフランク・ブクマンの事をたずねました。大使がいなくなるとロシア人が強い口調で私にむかってきました。「MRA、では君は僕等に反対だな」私はそんなことはないといいました。彼は私の考えをききたいといいました。私はもし現在の世界を救わなければならないとすれば、革命が必要である事を話しました。そして何百万の共産主義者達の真剣な努力を尊敬しているといいました。しかし彼等のアイディアは時代おくれで現状にはあわないといいました。

彼は憤慨していったいなぜかとききました。私は論理的に考えれば階級闘争の原理は必然的に原子戦争を誘発するといいました。共産主義は原子力の発達にともなって起った新

しい状況に対して思想としてこれに対応する事がまだできていません。それは原子力時代において、石器時代の考え方を振りまわしていると同じです。

弁証法的にいえば、毛沢東の方が正しくてフルシチョフの方が間違っています。昨年、北京で毛沢東は共産主義指導者にむかって「共産主義の勝利のためには戦争は避けられないばかりでなく、必要である。そのためならば三億人の人命を失っても悔いない」と言明しました。彼のいった三億人はかならずしも中国人の人命ではありません。

そこでソ連の外交官は私の持っている答は何かとききました。私は彼にMRAは共産主義よりも大きな革命であるといいました。なぜならばそれはどんな階級をも人種をも除外する事なく、しかもそれ等のすべてを大きな目的、すなわち世界を再建し、全人類の社会構造を改革しようという、すべての人間が受入れる事ができる大きな目的に向って動員する事ができるからだといいました。

そこでロシア人は「それではその革命はどうやって実現されるのか」ときました。私

は彼にフランスの繊維産業について話しました。欧州の繊維産業の経営者団体の会長がチエンジしました。彼は利益よりも人間を先に考える決意をしたのです。彼はフランスの繊維労働組合の委員長、職闘的なマルクス主義者で幾年も共産党の党歴を持っていた人を招きました。二人の間に生れた新しい精神によってたった二時間で彼等はある協約を作りあげ、その結果六十万のフランス繊維労働者が十六%の賃上げを獲得しました。繊維産業の雰囲気がちまらちにして変わりました。以来十年間、労働者の賃金は毎年大巾に上っています。生産の増強がそれを可能にしたのです。この協約は欧州全体の繊維産業の模範となりました。そして昨年その委員長は次のようにいいました。「ひと言のくしみの叫びもなく、一時間のストもなく、一滴の血も流されなかった。これこそMRAが経営者に対して、労働者に対しても同じように挑戦している革命である。」

ロシア人はいいました。「もし人間をそのように変える事ができるのであれば、私のマルクス主義は時代おくれた。ソ連では社会主義を四十年間実行している。しかし我々はま

だ人間の利己主義をあらため、新しい生活の動機をあたえる事に成功していないのだ」

その時、給仕の女が来て各種の煙草をすすめました。私はそれをことわりました。ロシア人は私を指差して「MRAは禁煙か」といいました。私はそんな事はないと答えました。「それならばなぜ煙草をすわないのか」とききました。「私の持っているすべての金は革命につきこまれている。煙草などのために使う事はできないのだ」と私はいいました。彼はビククリしました。そして「この仕事を君はそんなに真剣に考えているのか」とききました。「どういうわけで君達共產主義者は君達だけが本気で革命のために犠牲を払っている唯一の人間だと考えているのか」と私はいいました。

そこで我々は庭に出ました。色々のお酒が出されました。彼は私に酒をすすめました。

「のんだらいいじゃないか、金がかかるわけではないんだ。」私はコカコーラを取りました。「なんだMRAには禁酒の規約があるのか」「そんなものはない。君のような男と一諸にいる時には、頭をすっきりさせておきたいのだ」といいました。彼は笑いました。私

がどうしてもこの革命を始めたのかをききました。私は正直・純潔・無私・愛という絶対標準について話しました。そして私が心の中の声に耳をかたむける実験をした時の事を話しました。

我々英國人は癡病です。共產主義をはめて、その他の制度を攻撃しないと反動だと思われはしないかと恐れています。そしてインテリでないと思われる事をとてもこわがっています。そのためいつか自分で考えることをやめてしまつて周りの人々の喜びそうだと思う事だけを云つたりするようになってしまいました。我々は心の中で実験起っている事を人にはつきりと云う勇氣にかけています。我々は利巧であり、近代적であるといわれるために、無意味で面倒くさいスローガンばかりかかかっていますが、実際には心は死んでいるのです。

ロシア人はいいました。「君に二つの事をいいたい。私は一日百本以上の煙草を吸う。どうしてもやめられない。私を助ける事が君にできるだろうか」

次に彼はいました。「我々ソ連にいる人間は共産主義を別とすれば、M R A が世界中でイデオロギーとして活躍している唯一の思想である事を知っている。」

M R A は史上最大の革命

二週間前にコミニストというソ連の雑誌がM R A を分析して次のようにいっています。

「M R A は人類の文明を共産主義から救うもつとも強力な思想である」

しかし実は我々の目的はもつとずっと大きいのです。我々は西欧の世界を道義的な類廃から救い、そして共産主義をその弁証法自体に内在する矛盾から救おうと考えているのです。我々は共産主義者に対しても、非共産主義者に対しても、史上最大の革命に参加する事を挑戦しているのです。現代の世界で、本当のファシストであり、反動家である人々は、この原子力時代に他の階級や他の人種や他の国の犠牲において、社会を再建しようと考えている人々です。

人間は知的にも技術的にも巨人となつたけれども、道義的には、かえって小人のようにちぢんでしまったというのが、現在の世界の真の姿です。私のような人間はそれに対して大きな責任を持っています。我々は自分の頭を使って良心を殺してきました。そしてさらには、国の良心をも殺してしまおうと努力してきました。オールダス・ハックスレーはこの事を私よりうまく表現しています。彼は最近の二つの世代にわたって強力な影響を及ぼした哲学者です。その著『目的と方法』の中で彼は正直に次のようにいっています。「私は世界に目的という物が無いと考えるいくつかの理由をもっていた。その結果、いかんほどに目的がないのだと思うようになった。そしてその考えに苦もなく色々な理由をつけた。私にとつても多くの同年配の人々にとつても世界には所詮目的がないのだと考えることは解放への武器として使われたのである。解放とは政治・経済の制約からの解放であり、また道義的規範からの解放でもあった。我々が道義に反対をした理由は、それが性的自由に干渉するからであった。」

國の經濟が崩壊する前に、その國の精神が崩壊してゆくものです。國が本当の偉大さを發揮する前に、國の考え方が真直ぐにならなければならないのです。J・D・アンウィン博士はオールダス・ハックスレーがもつとも重要な劣作であると激賞したその著「性の文化」の中でこういつています。「しばしば人間は高い文化と低い道義の両方をエンジョイしたいと考える。あらゆる時代は偉大なエネルギーを發揮するか、それとも性的な自由をエンジョイするかのどちらかを選ばなければならない。しかし一つの時代が、その両方を実行する事は絶対にできない事が歴史によって証明されている。」

バートランド・ラッセルは今、戦争の危険について深く憂慮しています。私はそれに感奮します。しかし彼の考え方の矛盾は、彼自身の長年にわたって主張しつづけている人間は所詮動物に他ならない、という考え方自体が人類を戦争においやっているという事実です。バートランド・ラッセルはもう五十年以上に渡って性の自由を主張しつづけています。彼が気がついていない事は、人間がもし動物にすぎないとすれば、それはきわめて残

酷な暴力的なずるい動物であるという事です。動物はいつまでも動物であるし、他の人間をも動物のようにあつかい、歴史の必然の道をたどって、屠殺場か動物園のような世界を作り出すことになるのです。

オックスフォード大学クイーンズカレッジの学長をつとめ、日英協会の会長をもつとめたストリーター教授は、今世紀のもっともすぐれた頭脳を持った人でありました。彼はラッセル卿と遇った考えを持っていました。彼は人間の精神は単なる動物ではないと信じていました。人間の性質は変り得るし、MRAはそれをやっていると彼は信じていました。複雑ないい方や表現の方法にこまかされるのには、彼はあまりにも利巧でした。彼は「真実は簡潔、直截なものである」という仏教の考え方に同感していました。彼はいつても「知的に成長した國は道義的にも成長しなければ滅びてしまうだろう。」

現在における日本の役割

今こそ日本の時代が来ました。過去において日本は常に模倣の天才でした。西歐から近代的軍事知識を得て、世界最強の軍隊を作りました。日本は西歐から工業技術を獲得し、現在では私の考えによれば世界でもっともすぐれた工業国となりました。ところで今度は日本は偉大な模倣者でなく偉大な創造者になる時が来たと思います。道義の面において世界には重大な空白があります。日本は世界の道義的な指導者になることができるのです。

日本は現在東西兩陣営に対してはつきりとした權威を持って語る事のできる唯一の国です。アジアにおいては日本が西歐の援助を必要としているより以上に西歐が日本を必要としています。なぜならば世界は日本がアジアを正しい方向に導びかないかぎり、他の國がアジアを崩壊にさそってゆく事を知っているからです。

ソ連は日本に耳をかたむけます。ソ連は日本國民の勇氣と才能と技術を恐れているからです。中國も日本に注目しています。中國は自分の國から日本にあたえたはずの宗教や技術や文化が日本ではますます発展し完成したにもかかわらず、本國の中國では停滞し、低

下した事を知っているからです。

現在は人類の歴史の中でもっとも重要な瞬間です。人類が現在ほどの危機に直面した事はありません。我々は新しい暗黒時代を迎えるのでしょうか。大陸は崩壊され文明は崩壊し、にくしみと暴力を持って人間が人間を弾取し、支配する時代が来るのでしょうか。それともまた、人類史のもっとも輝やかしい時代がおとつれようとしているのでしょうか。

家庭が融合し、ふたたび愛しい地上のすべての者が神の家族のように生きる事を学ぶ時代が来るのでしょうか。

日本がその鍵を持っています。日本はすべての國の人々に対して社会正義と経済成長とそして永久平和への道を教える事ができるのです。日本はアジアの灯台です。皆さんがこれのおどろくべき、また重要な仕事に責任を持ってあたる決意をされるならば、今後、何世紀の間に生まれてくる人々は黄色人種も黒人も白人もみな立ちあがつてあなたの方のこの時代に感謝を捧げるでしょう。



ピーター・ハワード氏略歴

1906年生れ。長年、ビーバーブルック邸の主幹する
デイリー・エクスプレス紙の政治記者として、その卓
越した筆致を縦横に駆使して新聞界にこの人ありと注
目せられたばかりか、斯界最高の俸給を得ていた。

過去20年間はフランク・ブックマン博士とともに世
界各国でMRAのために献身的に奮闘してきた。

著書も多く10数カ国語に翻訳され、五百万部を売り
つくしている。劇作家としても有名で最近作の「真夜
中の音楽」「壁のある庭」「宇宙は素晴らしい」はロ
ーロッパ、アメリカで大好評を博している。

その他、ハワード氏は世界中の指導者と深い親交が
ある。

もっとくわしく知りたい方に

ピーター・ハワード著

フランク・ブックマンの秘訣

B 6 判 / 208頁 270円 / 〒60円 毎日新聞社刊

この本は、あらゆる階層のあらゆる民族の人たちがブックマン博士に接して、人生の転機を経験し、チェンジしていくありさまが、いきいきと描き出されている。ブックマン博士のこの秘訣こそは、現代文明に忘れられた最も大切な要素である。

タイガー 「虎」世界をゆく

相馬不二子著 320円 / 〒60円

B 6 判 240頁 アート写真32頁 文芸書院刊

東大・早大・慶大などの学生20人が、劇「虎」をたずさえて、4大陸13カ国、70都市を、MRA国際勢力150人とともに、800日にわたり歴訪・公演した快挙に参加した筆者が、13カ国の異なる環境の中で、実際に生活し、その間に見聞し、探求したことを、アート紙32頁におさめた100枚の写真を使って卒直にのべた興味深い記録。

今すぐお申込み下さい

申込先・東京都港区麻布富士見町19 MRAハウス
電話・(473) 2156~7

定価 40円